

「音楽分析から得られるもの、得られないもの」

石塚潤一 × 近藤譲 × 沼野雄司

音楽分析は、今日の音楽研究にとって不可欠なツールのひとつになっています。一口に「音楽分析」といっても、そこには様々な種類のものがありますが、それらの全てに共通しているのは、ある種の「科学的な姿勢」、つまり、分析というものは、主観に陥らない客観的な（少なくとも、間主観的な）論証に資するためにある、という考え方です。音楽についての、分析の裏付けを持たない言説は、独断的で、主観的な印象を述べたものでしかないと受け取られさえるでしょう。「音楽分析」は、音楽を論じる際にかくも大きな役割を担っているようです。では、音楽を論じるのではなく、曲を作り、演奏し、聴き、理解するといった音楽行為に当たっては、「音楽分析」はいったいどのような意義と役割をもっているのでしょうか。音楽の実践には、音楽分析は有用なのでしょうか。こうした問題を巡って、3人の音楽の論客が議論を戦わせます。

（文責：近藤 譲）

【日時】 2015年2月1日（日）14:00～16:30（先着20名）

【会場】 BUNCADEMY （東急東横線 学芸大学駅から徒歩1分）
〒152-0004 東京都目黒区鷹番 3-1-3 リエール鷹番 303号

【出演者】（五十音順、敬称略）

石塚潤一（音楽批評家）

近藤 譲（作曲家、お茶の水女子大学名誉教授）*司会

沼野雄司（桐朋学園大学教授）

【入場料】 2,000円（学生1,500円）

【予約・お問い合わせ】 info@buncademy.co.jp

⇒ ご予約の際には、お名前・人数・緊急連絡先をご記入ください。

BUNCADEMY

☎ 03-6452-4377

[Fax] 03-6452-4366

● HomePage: <http://buncademy.co.jp>

◎ blog: <http://buncademy.co.jp/wordpress/>

○ Facebook page: <https://www.facebook.com/buncademy>

～出演者プロフィール～

◆ 石塚 潤一 (いしづか じゅんいち)

評論：「松平頼則が残したもの」で、2002年度柴田南雄音楽評論賞奨励賞。以後、音楽批評家、制作者。読売新聞、音楽現代、洪水、ユリイカ別冊、ミュージック・マガジンなどに、音楽批評、時評、書評などを執筆。演奏会制作者として、2008年と09年「101年目からの松平頼則」を単身企画、制作。11年「松平頼暁 80歳の肖像」、12年「篠原眞電子音楽演奏会」、13年「平山美智子 90歳の軌跡」を共同制作。東京都立大学理学研究科修士課程修了（物性物理：理論）。代表的な書き物として、以下の三点を挙げる。

■「標柱 シリンガーとバークリーの理論を巡って」（菊地成孔・大谷能生『憂鬱と官能を教えた学校』河出書房新社、所収） ■「豊饒なる音響の海へと船出せよ」（川崎弘二編著『日本の電子音楽 増補改訂版』愛育社、所収） ■「誤用・分節・カタストロフィー 松平頼暁の管弦楽曲を概観する」（『洪水』第13号 洪水企画、所収）

◆ 近藤 譲 (こんどう じょう)

1947年東京生まれ。東京藝術大学で作曲を学び、在学中からその作品が注目を浴びた。1970年代初頭に、自ら「線の音楽」と名づけた独特の作曲方法論を提唱し、以後国際的に活躍。欧米の多くの主要機関や音楽祭から委嘱を受け、特集演奏会が組まれている。ほぼ全作品の楽譜がイギリスのUYMPから出版され、『オリエント・オリエンテーション』『表面・奥行き・色彩』（以上コジマ録音）をはじめCD録音も数多い。2012年、アメリカ芸術・文学アカデミーの外国人名誉会員に選ばれた。国内外の多くの大学で教鞭をとり、講演をおこなっている。お茶の水女子大学名誉教授。主な著書に、『線の音楽』『聴く人(homo audiens)』（アルテスパブリッシング）、『音を投げる』『〈音楽〉という謎』（以上春秋社）、『耳の思考』（青土社）など。

◆ 沼野 雄司 (ぬまの ゆうじ)

東京芸術大学博士後期課程修了。博士（音楽学）。主な研究領域は20～21世紀音楽。主な著書に『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ 前衛の終焉と現代音楽の未来』（音楽之友社、2005年）、『光の雅歌 西村朗の音楽』（春秋社、2005年、共著）、『日本戦後音楽史 上・下』（平凡社、2007年、共著）など。国内外での学会発表のほか、音楽批評、演奏会・CDライナー解説の執筆、音楽祭の企画・監修、コンクールの審査員、オーケストラや演奏活動の公的助成審査などに幅広く従事。2008年から2009年にかけてハーヴァード大学客員研究員。現在、桐朋学園大学教授（音楽学）。